

今は池田さんの持ち家であるが、「ごんべさ」という大きな家は昔、飲み屋であった。

どう言う意味か知らないが「ちゃんぽ」と呼ぶ女中がいて、有名であった。今でも、けつたいな名前だと記憶してから久しい。

新本さんは、盛大に機業を経営していたが、皆さん早く亡くなって、跡形もないのが惜しい。

特に土蔵の「扉」を縁取る白壁の装飾は、壊すに惜しい作品であった。

荒木さんは「餅屋」の屋号を奉る位、長い餅屋の経歴がある。

昔は、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、餅を食べたもんだ、そして元気回復した。「元気を付ける荒木の餅」であったと思う。

大成に属するが、「かいほつや」の、織田さんは、福島の連中には世話になった人も多いであろう。

明治の新時代になると、養蚕をしての生糸と、織物としての絹は輸出の最先端のものであった。

我々の先祖もいち早く養蚕に専念し、漸く敷設された鉄道の輸送に励まされて、その鉄道を挟んで、桑畑が、さながら海のように広がっていた光景が、幼い日々の頭に焼き付いている、光景である。

織田さんの家は、繭の集荷場であったし、繭をおいて、一杯飲みな

がら、長い労働の成果を、喜ぶ、楽しい場所ではなかったろうか。

いずれにしても、昔の福嶋人はよく働いたと思う。

第二道路を歩いてみた。

「とまり木」の、高塚さんの家は、目立たないかも知れないが、米沢実、県会議員の世盛りの時代に、次男の俊隆のために建てた家だと思ふ。

庄助さんの、前に先に記した豪邸を建てたが、その基材を使つて建てたという、従つて建築も建材も充分吟味した建物である。

池田さんの家も、亀田與三松さんが、大阪から帰郷し建てたもので、瀟洒な建物である。

琴を教授している、犬丸さんの家も建築時と少し変わっているようだが、美しい福嶋らしい住宅である。